



2011 Formula Nippon
Project μ /CERUMO・INGING Race Report
第3戦 富士スピードウェイ

□ 7月17日（日） 予選／決勝

#33 国本 雄資 予選11位／決勝15位

< 公式予選 > 天候:晴れ | コース状況:ドライ



鈴鹿、オートポリスと開幕からの2戦では、十分なスピードを見せながらも惜しくもノーポイントに終わっている Project μ /CERUMO・INGINGと国本雄資。パフォーマンス自体は悪くはないものの、なかなか流れに乗ることが出来ていない状況だが、今大会の舞台は F3 時代に最も走り込んだ富士スピードウェイ。さらに今大会は予選～決勝を日曜のワンデーで行うという変則スケジュールとなっているため、金曜に1回、土曜に2回と、日曜朝の公式予選までに合計3回のフリープラクティスが組み込まれているため、通常よりもしっかりと準備

して予選に臨むことが出来たとあって、チームも国本自身も期待を持ってレースウィークを迎えた。

金曜、土曜と3回のセッションで順調に走行を重ねた国本。路面温度 50℃を超えるような暑さが続いたが、「それほど暑くも感じなかったし、体力的にも問題ない」と十分な手応えを得て、土曜午前8時10分からの公式予選に臨んだ。

ノックアウト方式で行われる今回の公式予選は、まず20分間のQ1を行い、トップ12台がQ2に進出。そこでのトップ8台が最終のQ3へと駒を進めるという形。Project μ /CERUMO・INGINGと国本は、まずはQ2進出を目標に、まばゆいばかりの晴天の午前8時11分にコースに飛び出して行く。

ニュータイヤを履いてピットを離れた国本は、ゆっくりとタイヤを温めつつ計測1周目を1分30秒261で終えると、翌周には一気にアタック。ここで1分26秒221をマークした国本は、この時点で6番手とまずまずの滑り出し。場内のモニターも国本を追いかけ、ピット内のスタッフもこの様子に見入る。しかし、そのまま翌周もアタックしたものの、惜しくも1分26秒809とタイム更新のならなかった国本は、そのままピットイン。さらなるタイムアタックのタイミングを待ち、いったんピットで待機する。

この間に若干のセッティング変更を施した Project μ /CERUMO・INGING は、残り6分となった午前8時24分、多くのライバル陣営と同様のタイミングで国本をコースに送り出す。タイヤは先ほど履いていたタイヤのままである。

コースインした国本は、ここで1分26秒618までタイムを刻んで行くが、それ以上のタイム更新はならず。しかし、2セット目のニュータイヤ投入は不要とのチームの読みどおり、国本は11番手で無事Q2進出を果たす。

約10分間のインターバルをおいて行われたQ2。今度は7分間と短いセッションのため、アタック出来るのは事実上1～2周。さらなるセットアップ修正を受けた国本は、ワンチャンスを狙ってニュータイヤを履き午前8時40分のセッション開始からひと呼

吸おいてピットアウトしていく。

計測 1 周目を 1 分 31 秒 042 とした国本は、計測 2 周目にアタックし 1 分 26 秒 105 と Q1 のタイムを更新するが、この時点でのポジションは 9 番手。なんとかトップ 8 に食い込むべくラストアタックに賭けた国本は、S1 で 18 秒 853、S2 で 25 秒 554 と好タイムを積み重ねて行くが、ラストの S3 では思うようなマシンバランスが得られず、フィニッシュラインでは 1 分 26 秒 116 とタイムアップならず。

結局この Q2 での国本は 11 番手に終わり、惜しくも Q3 進出はならず。国本は午後の決勝を 11 番手からスタートすることとなった。

< 決 勝 > 天候:晴れ | コース状況:ドライ

夏休み目前の週末だけに、真夏のような暑さとなった午後 2 時 40 分。気温 32 度、路面温度 50 度という暑さの中、いよいよ決勝レースのフォーメーションラップが始まった。レース距離 200km、44 週のレースながら、2 回の 4 輪交換が義務付けられた決勝に向け、チームでは Q3 進出を逃した反面、残った 2 セットのニュータイヤを活かし、ユーズドタイヤでスタートし、2 回のピットインではニュータイヤを装着しペースアップ、上位入賞を狙う作戦を採ることとしていた。

迎えたスタート。国本はまずまずのスタートを決めると、1 周目のダンロップコーナーへの飛び込みなどで大嶋和也、石浦宏明らを次々にオーバーテイク。11 番手からのスタートながら、1 周目を 8 番手としてホームストレートに戻ってくる。

しかし、いったんかわした大嶋にスリップを奪われ、1 コーナーでの逆襲を許した国本は 9 番手に後退。それでも、序盤を 1 分 28 秒台のまずまずのペースで周回し、前の大嶋、背後の中嶋大祐らと接近戦を演じることに。ポジションは 4 周目に中嶋がピットインしたため 8 位に再浮上。さらに 8 周終了時にジョアオ・パオロ・デ・オリベイラがピットにはいったことで、国本は 7 番手となっていく。

9 周目、ポイント圏内を突き進む国本の目前には、大嶋に抜かれた 6 位の伊沢拓也が。ペースの上がない伊沢に対し、国本は 10 周目の 1 コーナーでアウトから並びかけると、コココーラコーナーのインでインを閉めようとする伊沢に屈せず、そのドアをこじ開けるようにオーバーテイク、6 番手へと躍進を果たす。

そしてチームは 12 周終了時に予定通り国本をピットインさせ、1 回目のタイヤ交換と給油を行うと、再び国本をコースに送り返す。同じような周回数で上位陣の何台かもピットに入るが、ニュータイヤを得た国本は上位陣に比肩する好タイム、1 分 27 秒 608 をたたき出すなどペースアップ。ポジションこそ、いったん 10 番手あたりまで下がってしまったが、前を行く小暮卓史をじりじりと追いつめて行く。

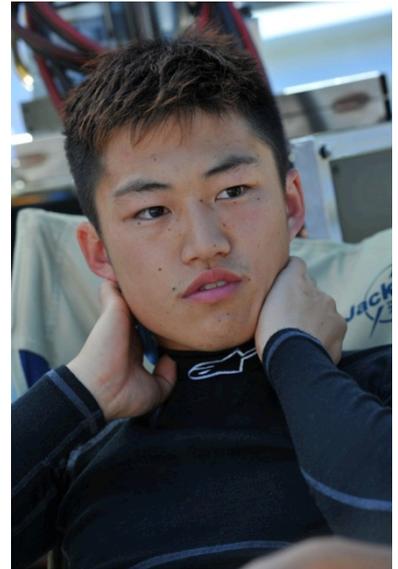
コンマ数秒差でこの小暮を捉えようとした国本だが、23 周終了時に小暮がピットイン。戦わずして 9 番手に浮上した国本は、上位陣の相次ぐピットインによって 25 周目に 7 番手、26 周目に 6 番手とポジションを上げて行くものの、S1 などでややラップタイムが落ち始めてしまう。すると、3 番手に浮上した 27 周目、なんと国本のエンジンが突如パワーを失ってしまう。このため、急遽 Project μ/CERUMO・INGING は、予期せぬトラブルに見舞われた国本を 28 周終了時にピットインさせる。ピットロードから、そのままガレージにマシンを入れてしまう国本。すぐさまメカニックたちが国本のマシンに取り付き、トラブルの修復作業にあたる。

このメカニックたちの作業により、下がっていた燃圧が復活した国本は、再びニュータイヤでピットアウトするが、この段階で残念ながらトップからは約 4 週のラップダウンとなってしまふ。

それでも諦めずプッシュする国本は、復帰した翌週に 1 分 27 秒 501 という自己ベストをマークするなど気を吐いたが、大きな後れは取り戻すことは出来ずチェッカーを受けたものの、ポジションは 15 番手。今回こそポイント獲得が目前であっただけに無念のトラブルが悔やまれるが、この悔しさをバネに次戦もてぎでの国本の奮闘を期待したい。

ドライバー／#33 国本 雄資

「まだ詳しい原因は掴めていませんが、どうやらエンジンの燃圧が落ちてしまったようで、急激にパワー感がなくなってしまいました。自分としては、突然パワーがなくなったように感じたんですが、チームではその少し前からセクター1 が遅くなっていたので、異変を感じていたようです。もしかしたら、小暮選手の後ろを走っているときに、既に兆候があったのかもしれませんが。それまでの展開としてはスタートでも順位を上げられましたし、レース中のラップタイムも悪くなかったんで、だいぶ F ニッポンのレースにも慣れて来た手応えもありましたし、ポイントが獲りたかったのですが……。残念ですがトラブルなので仕方がないですし、次のもてぎは比較的好きなサーキットですし、必ずポイントが獲れるよう頑張ります」



監督／立川 祐路

「トラブルが出てしまったので、ちょっと残念なレースになってしまいました。予選はもちろん、レースペースも悪くなかったし、ピットイン後にニュータイヤでペースを上げるという作戦的にも順調に機能していたので、トラブルが出なければポイント圏内でフィニッシュ出来たと思いますし、それだけにもったいない思いです。F1 を経験した中嶋一貴選手は正確にはルーキーではないと思いますから、彼を除いた今季のルーキーの中では、国本が一番前を走っているドライバーだと思いますし、ここからは今日の小暮選手との攻防のように、中堅どころやベテランドライバーたちを切り崩して行けるかが課題になって来るでしょう。そのためにも、今日のようなトラブルが出ないよう、チームとしてしっかり彼をサポート出来るよう、引き締めて次戦もてぎではポイント獲得を目指したいと思います」